

小動物の飼育について

須 永 淑

幼児と動物とのかかわりは、同じ自然物とは言っても植物やその他の場合と異り、格別な意味をもっていることに気づく。それはこの年令の幼児に見られる発達の特徴によるところも多い。即ち、あらゆる自然界の現象も物も、自分と同列の仲間として応答関係において受け入れる傾向を、強くあらわす時代であるから、生きて動いて多少なりとも反応を示す動物に対しては、強い共感と興味を示して、積極的に対応してくる。この心の姿勢は実物とふれ合いながら次から次へと新しい感動をおこし疑問を生み、思考力を育て、想像をひろげて目に見えぬ働きとなって後々までも文化の創造につながる原動力を育てていると思うのである。一方では動物という限りある生命現象を身近に知ることによって、幼児なりに自然界への目がひらけてくる。それは自分をも含めて大自然の中での人の在り方をめぐる自然観、生命観にもつながるものを含んでいる。この意味において、保育の中に動物飼育を取り入れることは重要なのである。したがって、この場合単に自然領域としてせまく考えるのではなく、子どもたちの生活そのもののありかたとして、日常の暮らしの一部として動物をも含めて扱うのがのぞましい。保育者は、飼育に対する教育的視点をはっきり自覚して日常の実践を方向づけてゆきたいものである。

今回の実践例の発表については、表に示されたものを中心に、分科会での口頭発表のあとをたどりながらのべる。

まず保育園全体でこの実践にとりくんでいったことが、非常に大切であり、たいへんよいことであった。動物飼育に関しては特に全園的な計画がのぞましい。責任をもって組織的に世話をするのは、中心になるクラスであっても、どの子もいつも自由に

ふれられる状態を設定してほしい。そこで年令相応のかかわりかたを全園で研究し計画してゆくのが理想である。

この園の場合、最初はごく普通のできごとであった。散歩、虫をさがしにゆく、桑の実を発見、食べられる話し合い、ジャム作り、虫の食べる葉っぱ、そして蚕の話。ここまでの間に保育者は幼児とともに次第に目的意識がはっきりしてきた。この段階までは、おそらく誰でもよく行うところであろう。

ここで蚕の飼育へと入ってゆくが、この決定こそ大切にしたいところである。保育者側の身についていた保育観、自然観、園内のチームワーク、園の保育方針、またその環境などの条件がこの決定にさせたと思う。そしてこの園にふさわしい方法で次々と活動がはじまるのである。

計画にしたがって幼児の興味を次第に蚕にしぼり、目的意識をもち上げるために種々の働きかけがなされていったことがわかる。この段階では図鑑が有効にはたらいだ。図鑑をみて話し合っているが、子どもたちは大部分蚕を見たこともないのであり、知ったのは桑の葉を食べる虫だということであった。ここで計画的に実物が保育室に持ち込まれた。蚕の生きて動いているのを見た子どもたちの驚きは大きかった。そして今まで虫とりをしたり飼ったりしたこともあるので、これも飼いたくなってくる。

保育者側は、いろいろな活動を盛り込みながら蚕について考えさせて、「桑さがし」へと誘導していった。蚕を中心にいろいろな領域にわたって総合的に考えさせながら、次第に、「飼いたい」という共通の目標に向ってみんなの心をもり上げてゆくのである。

いよいよ蚕を飼うことが始まった。小さい小さい蚕との出会い、そして次の朝はふ化してくるもっと小さい黒い粒のような幼虫を見て、蚕の卵と蚕の赤ちゃんが全員に深く印象づけられ、本気になって桑さがしがはじまるのである。

保育園で蚕を飼う、ということが幼児、保育者ともに、いろいろなできごとをとおして地域との関係を深めてゆく姿が思いやられるのである。自然界や社会というものに幼児なりに目ざめてくる様子がたくさん見られる。「桑畑と養蚕の仕事」「桑の葉の保存」「桑の葉と消毒や殺虫剤」など、そして協力的な人たちとの出会いもたくさんあった。このような場合に居合わせて子どもが体験的に感覚的に学ぶものは大きい。

大切な経験である。

蚕を育てながらすごすうちに、「大きくなったらしまいになるか」と考えるようになった。再度の図鑑の登場である。第一の場合と異なるのは、実物をみて図鑑でしらべるといふ基本的な科学性が身につけていることである。この期間にもものを見る眼と考える力がそこまで育っていたのである。「研究する」などという言葉が出てくるのも楽しい。次から次からと疑問が出てくる。蚕を見る目がちがってくるし、気のつくところがちがってくるのである。話し合いが盛んになり、クラス全体が、そして園全体が蚕を中心にいきいきと活動しているのがよくわかるのである。脱皮をくりかえして大きくなった蚕にそーっとさわったり、桑を食べる様子に見入ったり、桑を食べる音をきいたり、全身を使い、全生活で蚕とふれ合っている様子である。

この時期は蚕を中心にいろいろな活動が計画できる。お話はもとより、劇に仕立てたり絵や制作に取り入れたり、身体表現や歌にしたり、幼児の年齢や傾向によって楽しい遊びの主題として感動を再現すると予期しなかったほどの盛り上がりを見せるのではなかろうか。

蚕はまゆを作りはじめた。さらに最初の蚕は蛾になった。そして図鑑でしらべて蛾の細部まで納得ゆくまでよくみることができたのである。蚕は家に持帰られると家庭からの反応はいろいろあったが、一応協力的で丁寧な連絡があったのは心強いものである。

蛾は卵を産んで死ぬ。みんなで育てた蚕がどうなってゆくか、幼児は蚕の一生と一緒に生活しながら自分のものとして経験した。そこに自然界の生命というものを具体的に理解するのである。卵を産んで死んだ蛾を大切に埋める姿と「蚕さんもよかったね。」と思わず声をかけた保育者と、蚕の残していったものは大きいのである。

長期にわたる一生けんめいな活動を社会的認識にまでむすびつけ、感動を再現しながら本当の意味での知ることまで整理したのはテレビであった。保育者も予期しなかったほどの活発な反応で、絹織物へのつながりまで一貫して理解したのは時期がよかったことと、実物との生活が充実していたからであると思う。

以上、実践をたどって全般的に見渡すと、今後の幼児教育全般の中で大切に守り育てねばならない点が、いくつか浮び上がってくる。一つは小さな虫でも魚でも自然界の一部分という見方をもって保育に取り入れることである。桑の樹と桑畑と蚕の関係で

取り扱ったからこそこの活動は高く評価される。飼うには飼っても、買ってきた玩具と同じ扱いでは違うのである。気候も植物も動物も人も互に絡みあって運行してゆく感覚を育てることが、この種の保育を取り入れるのに大切ではないだろうか。

次に視聴覚教材は今後ますます完備して都合よくなると思うが、その使いどころを注意してほしい。見るとは本物を目で見、手でさわり、意識してはっきり心に受け入れることである。安易に映像や図版で実物を代用してはならない。どんな貧弱なものでも実物にふれさせ、できれば一緒に生活して給餌やふんの始末などの経験を加えたのである。それに対応して図鑑やテレビが使われるのは効果が大いである。

私たちは園での動物飼育をもっと身近に小さいもので少しずつでもとり入れてゆきたい。少々まとまりがわるくとも、とにかく現代に最も必要な保育の内容であり、各領域の活動をささえる力を生む材料として、取り入れてゆきたいものである。

(本学助教授)